

2021 年 4 月 18 日（日）「知恵の向こう側」

《聖書協会共同訳》コヘレトの言葉 8:15-17

15 そこで、私は喜びをたたえる。太陽の下では食べ、飲み、楽しむことよりほかに、人に幸せはない。これは、太陽の下で神が与える人生の日々の労苦に伴うものである。

16 私は知恵を知るために心を尽くし、地上でなされる人の務めを見ようとした。昼も夜も、見極めようとして目には眠りがなかった。

17 私は神のすべての業を見た。太陽の下で行われる業を人は見極めることはできない。人が探し求めようと労苦しても、見極めることはできない。たとえ知恵ある者が知っていると言っても、彼も見極めることはできない。

《新改訳 2017》伝道者の書 8:15-17

15 だから私は快樂を賛美する。日の下では、食べて飲んで楽しむよりほかに、人にとっての幸いはない。これは、神が日の下で人に与える一生の間に、その労苦に添えてくださるものだ。

16 私が昼も夜も眠らずに知恵を知り、地上で行われる人の営みを見ようと心に決めたとき、

17 すべては神のみわざであることが分かった。人は日の下で行われるみわざを見極めることはできない。人は労苦して探し求めても、見出すことはない。知恵のある者が知っていると思っても、見極めることはできない。

【序論】

今日で8章を終えることになります。ここまで「コヘレトの言葉」を学んでくる中で、私は説教者としてかつて経験したことのない感覚を度々覚えてまいりました。それは、所々で著者が言っている事柄の意味が掴みきれないまま説教を書き始めなくてはならないという、やや不安定な感覚です。一週間という限られた時間内で何が何でも説教は用意しなくてはなりません。そういうとき、私は不安と期待の入り混じった思いを抱きながら原稿を書き始めます。もちろん、説教準備の一連の流れを経た上での話です。しかし、コヘレトが本当に言いたいことが分かってくるのは、説教を書いている最中であることが時々あるのです。これがポイントだろうと思っていたことが違っていたことに気づかされ、修正することもあります。これは説教を作成する醍醐味でありまして、神の啓示の意味が自分に示されてきていることを実感する瞬間です。会衆の皆様にも私の喜びの一端を共に味わっていただきたいと思いますと思いながら、講壇に立っております。

【本論】

今日は三つの節を扱いますので、シンプルにスリーポイントでまとめてまいります。

①感謝（15 節）

②探求（16 節）

③悟り（17 節）

この箇所全体に溢れているコヘレトの思いを一言で申しますと「もやもや」となるでしょう。この世界で起きている出来事の意味を見出そうとしてみるけれど、答えが出せないところで行き詰まり、やけくそになり、また探求に進み、結局「分からない」という結論に至る。しかし、その曖昧な結論の中に一つの答えを見出しているとも言えます。

本論 1. 感謝

そこで、私は喜びをたたえる。太陽の下では食べ、飲み、楽しむことよりほかに、人に幸せはない。これは、太陽の下で神が与える人生の日々の労苦に伴うものである。(8:15)

「そこで」(原文では「and」を意味する「וְ/ヴェ」)とあるからには、先の内容とのつながりを持っているはず。直前の 14 節を振り返ると、この地上では「**悪しき者にふさわしい報いを正しき者が受け、正しき者にふさわしい報いを悪しき者が受ける**」という不条理が当たり前に起きていることが指摘されています。もちろん、これに対するコヘレトの評価は「不満」の一言に尽きるのですが、分かっているながらこの悪しき現実を変えることのできない無力さに彼は苛まれていると言えましょう。それならどう生きようか。今楽しめることを存分に楽しもうという小さな答えを見出したのです。「**太陽の下では食べ、飲み、楽しむことよりほかに、人に幸せはない**」という表現は、これまでもたびたび出てきました。

- ・ 食べて飲み、労苦の内に幸せを見いだす。これ以外に人に幸せはない。それもまた、神の手から与えられるものと分かった。(2:24)
- ・ また、すべての人は食べ、飲み、あらゆる労苦の内に幸せを見いだす。これこそが神の賜物である。(3:13)
- ・ 私は見極めた。人は自分の業を楽しむ以外に幸せはないと。それがその人の受ける分なのだから。彼の後に起こることを一体誰が彼に見せることができるか。(3:22)

いずれの箇所を見ても共通して言えることは、コヘレトの中には現世に対する一種の「絶望」があるということです。人間の一生とは、時間・空間・能力・物質において、限られたものであり、「定め」の中で必死に生き、そして人生を終えていく。その限り

ある一生を厭々ながらに生きるべきか、それとも与えられたものに感謝して生きるべきか。私は感謝する方を選ぼう。すべてを「賜物」と捉えよう。「食べる」「飲む」、加えれば「働く」「眠る」「排泄する」「目覚める」「家族や友人と過ごす」、こういった一つひとつの日常のありふれた営みを最大限に喜んで生きるべきではないかと彼は読者に勧めているのです。これは一面においては消極的な人生観ではありますが、他面においては極めて積極的な人生観とも言えます。ここで私が後の方に「積極的な人生観」を置いているのも意図あつてのことです。「確かに人生には様々な制約がある。しかし、人はその中で最大限に充実した生き方をすることができるのだ！」と言いたい。順序を逆にすると、意味は変わってきます。「人生は充実しているように見えるが、どうせギュッと何かに縛られたものにすぎないだろうか？」と。このように、同じ物事を見るにあたっても、ポイントをどちらにするかによって意味は正反対のものになってくるのです。言葉の力はすごい。私たちは主にあつて前向きに生きることができるのです。

コヘレトは「これは、太陽の下で神が与える人生の日々の労苦に伴うもの」と言っています。その人生に神の支配を見出していくところに、既に彼の前向きな姿勢は現れている。すべてを「神からの賜物」として感謝をもって受け取ることができるからです。

私は当初、この説教の構成を立てていた際に、本論①を「絶望」としておりましたが、ここに来て「感謝」と書き換えました。こういうことが説教を書いていると起きてくるから面白いのです。これは私たちの人生そのものにも起きることではないでしょうか。その鍵を握るのは、この人生に神の支配を認めるということにほかなりません。

本論 2. 探求

私は知恵を知るために心を尽くし、地上でなされる人の務めを見ようとした。昼も夜も、見極めようとして目には眠りがなかった。(8:16)

コヘレトは 15 節で「感謝をもって生きること」を勧めていましたが、その思いの裏側にはやはり「この世」に対する「不満」が隠されてもいます。彼の心は何度も揺れ動き、再び「地上でなされる人の務め」の意味の探求へと進んでいきます。かつて彼は労働の喜びを認めてもいました。

私はすべての喜びを享受し、心はすべての労苦を喜んだ。これがすべての労苦から得た私の受ける分であつた。(2:10)

その一方で、彼は労働の空しさを滔々と語ってもいます。

太陽の下でなされるすべての労苦と心労が、その人にとって何になるというのか。彼の一生は痛み、その務めは悩みである。夜も心は休まることがない。これもまた空である。(2:22-23)

矛盾した労働観のようではありますが、既に学んだように、同じ「労苦」が喜びとなるか空しいものとなるかは、やはりそこに神の存在を見出すか否かにかかっています。

16 節の後半では「眠れない」という状況が伝えられています。コヘレトは「知恵の追求」と「この世界で起きている出来事の観察」に没頭した結果、眠れぬまでになってしまったというのです。それは恐らく、考えすぎたことが「心配」や「怒り」と結びついて行ったからだと思われます。

人の眠りを妨げる一番の要素は何と言っても「心配」でしょう。また、何らかの「ストレスを覚える経験」も私たちから安らかな眠りを取り去ります。思い出される恨みや怒りも、眠りの大敵です。これらは信仰を持っていればまったくなくなるということではありません。試練は次から次へと訪れます。しかし、信仰を持つ人には出口があるのです。不安や怒りを最終的に持って行く場所がある。それは祈りです。祈りによって神に打ち明け、神にそれを預け、委ねるという道です。私はヒゼキヤ王が行なったことをそのまま真似して祈ることがあります。

ヒゼキヤは、この手紙を使いの者の手から受け取って読むと、主の神殿に上った。ヒゼキヤはそれを主の前に広げ、主に祈って言った。「ケルビムの上に座しておられるイスラエルの神、万軍の主よ。あなただけが地上のすべての王国の神であり、あなたが天と地をお造りになったのです。主よ、耳を傾けて聞いてください。主よ、目を開いて見てください。生ける神を罵るために送ってよこしたセンナケリブのすべての言葉を聞いてください。主よ、確かにそうです。アッシリアの王たちはすべての王国とその国土を荒廃させました。彼らはそれらの神々を火に投げ込みました。しかし、それらは神ではなく、木や石であり、人の手で造られたものにすぎないので、滅ぼすことができたのです。私たちの神、主よ、どうか今、私たちを彼の手から救ってください。そうすれば、地上のすべての王国は、あなただけが主であることを知るようになるでしょう。」（イザヤ 37:16-20）

神の御前に自分の問題を具体的に開示する。そこに道は開ける。自分がどう行動すべきであるかが示されていくのです。何らかの怒りが生じる経験をした時にも、自分で復讐をしなくても神が復讐をしてくださるという約束に立つことができる。それは、神が「すべての業」（17 節）を支配しておられるからです。

本論 3. 悟り（知り尽くし得ぬ神の御業）

私は神のすべての業を見た。太陽の下で行われる業を人は見極めることはできない。人が探し求めようと労苦しても、見極めることはできない。たとえ知恵ある者が知っていると云っても、彼も見極めることはできない。（8:17）

神の支配は全世界に及んでいるということがここに告白されています。その支配の範囲は、不思議なことです、罪深い人間の活動の上にも置かれているということです。人間は自由意志により悪を企み、隠れて罪を犯します。それによって犠牲になる人々がいます。その悪しき現実には、到底納得のいく説明ができるものではありません。あるいは、自然災害、不慮の事故、病気によって命を失う人々も多くおられます。これら一つひとつの意味はまだ明らかにされておらず、意味が分からないところで人間は苦悶し、無理に意味を与えることでかえって傷つく人が出ることもあります。ここにコヘレトの不満がある。しかし、彼はそこまで物事を突き詰め、その答えを見出すための知恵を追求したところで、一つの結論に到達するのです。それは「**太陽の下で行われる業を人は見極めることはできない**」ということです。更に、この世界全体で起きていることは、結局のところ「**神の業**」なのだと。人間にはその深遠な神のご計画を悟ることはできない。「たとえ知恵ある者が知っていると言っても、彼も見極めることはできない」。「知っている」と言うことは「知ったかぶり」だということでしょう。

ここで一つだけ付け加えるならば、コヘレトがやってきた「知恵の探求」が無意味だったということではありません。彼は考え抜き、答えを見出せずに苦悶し、あらゆることを試してみた結果、最終的に行き着いた場所はやはり「神」であったと言っているのです。即ち、すべてを知り、すべてのことに答えを与え、やがて万人に開示してくださる神の御手に委ねるという道です。最初からその結論を持って生きることでも幸いですが、コヘレトのように紆余曲折を経て最終的な真理に到達するという道も尊いものです。

まことの知恵は神から来る。そのことは聖書の多くの箇所が証言しています。

- ・ **なぜなら、神について知りうる事柄は、彼らには明らかだからです。神がそれを示されたのです。**（ローマ 1:19）
- ・ **世は神の知恵を示されていながら、知恵によって神を認めるには至らなかった**ので、神は、**宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうと、お考えになりました。**（Ⅰコリント 1:21）
- ・ **隠されたことは、私たちの神、主のものである。しかし、現されたことは、とこしえに私たちとその子孫のものであり、私たちがこの律法のすべての言葉を行うためである。**（申命 29:28）

【結論】

「分からない」ということを認め、神の御手に委ねることが知恵である。これはヨブ記のテーマとも一致しています。ヨブには苦難の意味が最後まで分かりませんでした。

「人間には分からない」事実を認めることが知恵だったのです。そして、来るべき日に神がすべての意味を教えてください、と信じるのが「知恵の向こう側」であります。

【祈り】

創造主にして統治者なる神よ。私たち人間は、限りある人生をどう生きるかが問われています。そのところに神の支配を認めていくとき、与えられた時間や能力を少しも無駄にはできないという積極的な思いが与えられていきます。この世界で起きていることの意味は分からないことばかりですが、それらすべてがやがて開示されることを信じ、自分にできる精一杯の人生を歩みたいと思います。その中心に常にあなたを置くことができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

人間の無味乾燥なる日々の営みに、ご自身の臨在を見出させ給う、父なる神の愛、人生の不条理に対する怒りのすべてを、神の御手に委ねさせ給う、主イエス・キリストの恵み、

「分からない」事実を認めるところに、まことの知恵のありかを示し給う、聖霊の親しき交わりが、

あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。